

私立 法政大学

プログラムの名称：「学生の力」を活かした学生支援体制の構築

-- クラス・ゼミ(正課教育) クラブ・サークル(正課外教育)に次ぐ、『第3のコミュニティ』づくり

プログラム担当者：文学部 教授・学生部長 安東 祐希

キーワード

1. 第3のコミュニティ 2. 大学/学生の協働体制 3. 学内インターンシップ
4. 悩みの多様化

1. 大学の概要

本学の歩みは、建学からの理念、「自由と進歩」の精神に一貫して導かれてきた。『社会の進歩を担う自由な個』、つまりは『自立型人材』を、社会に開かれた場として形成すること、これが建学以来、本学が目指してきたものである。本学は、学生一人ひとりが自らにふさわしくキャリア形成を行っていけるよう、そのプロセスを支援し、その結果として、自立的で社会の進歩に資する人材を世に送り出すことを理念・目的としている。

自立型人材の育成のため、本学では、学生一人ひとりが「Career Power」を身につけるためのサポート体制確立を目指している。「Career Power」とは、知識を広げながら、自己の創造性を絶えず高める、習得した知識をベースに新しい課題を発見し、学びの共有者と議論・協力しながら新たな解決策を導き出す力のことである。本学では、こうした学びのプロセスで発揮される思考力や行動力、コミュニケーション能力、つまり総合的な知性(=「人間力」)を身に付けさせることを目標としている。

2. 本プログラムの概要

今日の学生の気質やニーズ、悩みの多様化に対応するため、現在学生部、学務部、キャリアセンター等、部局ごとに提供している学生支援策について、部局横断・連携体制(仮称：法政大学ピアサポートコミュニティ、以下「PSC」)を構築する。

PSCでは学内インターンシップの形式で学生スタッフを運営の柱として採用し、大学、学生の協働体制で支援策の企画、実施に当たる。部局の横断連携により学生の成長段階に合わせた柔軟かつ多面的な支援策を、また学生の視点を持つ学生スタッフの採用により学生の立場に立った実効的な支援策を提供できる。さらに、学生同士

が悩みを共有し助け合うという仕組みを通じ、学生が社会に羽ばたく上で最低限必要な社会性を得るという副次的効果も期待できる。

基本コンセプトは「“クラス・ゼミ”、“部・サークル”に次ぐ第3のコミュニティ」である。

3. 本プログラムの趣旨・目的

本学では、新入生合宿やオープンキャンパス支援・新入生サポーター制度などの課外活動における成功実績をもとに、新しい形の学生支援を目指す。それは、学生の知恵、活力を土台に、大学と学生、外部の専門スタッフからなるプロジェクトチームによって実施される学生支援である。

現在、本学では、手話講座、パソコン、ノートテイク講座、新入生合宿、オープンキャンパス支援、災害救援ボランティア講座、上級救命講習会、食生活相談会等々の活動を、それぞれの担当部局が、学生のニーズやシーズンに合わせた学生支援策として展開している。

しかしながら、このような学生支援策は、本来「学生の視点」をキーとして一貫性をもって統一的に実施されるべきである。すなわち、学年や学生の成長段階に合わせたコンセプトと期待される効果の基で、担当部局が有機的に連携したプログラムが検討されるべきであり、部局ごとが別個に、おのおのの支援策を講じている現状を是正する必要があると認識している。

また、こうした展開は、コストやマンパワーの効率化の面からも有効な方法であると考えられ、学生支援活動の今まで以上の費用対効果を生むものと考えられる。

以上のような認識から、現在、学生部、学務部等、個々の部局で別個に行っている学生支援策について、部局、キャンパス(市ヶ谷、多摩、小金井)を横断する体制として「仮称：法政大学ピアサポートコミュニ

ティPSC」を構築し、トータルシステムとして展開を図りたい。

これにより、大学は、学年や学生の成長段階に合わせたコンセプトに基づいた総合的な支援策を学生に提供でき、学生は、おのおのが置かれる環境・状況の中で、知的欲求や成長願望、コミュニケーション渴望、不安等、何らかの「要望」「悩み」「不安」等を感じたときに、迷うことなくひとまずPSCへ駆け込むことができる。

基本コンセプトは「クラス・ゼミナール(正課教育)クラブ・サークル活動(正課外教育)に次ぐ、第3のコミュニティ作り」である。

さらに、学生の気質やニーズ、悩みが多様化した今日において、新しい学生支援体制を考えるにあたっては、「学生の視点」と「学生の力」を活用する事が重要である。本学では、新入生合宿やオープンキャンパス、新入生サポーター等の、「学生の視点」と「学生の力」の活用実績があるが、学生しか持ち得ない視点や実行力は、これら行事を遂行する上で、今や必要不可欠なものとなっている。新しい学生支援体制を検討するにあたっては、この学生の能力を最大限活用する体制を導入すべきである。

「大学と学生が協働する学生支援制度」は、学生のニーズに沿った学生支援策の提供において、最大の効果を呈するものと考えられる。

4. 本プログラムの独自性(工夫されている内容)

(1) 部局横断体制の設置と学生の活用

学生の支援にあたっては、「学生支援を担う部局(学生部、学務部、キャリアセンター等)を横断する体制」を構築する。

学生から寄せられる要望や悩み等のうち、単独部局では対応が難しいもの、複数部局で対応した方が効果の見込めるものについては、PSCの「運営委員会」で協議の上、PSCの学生支援プロジェクトとして対応すべきかどうか、要望や悩みのどの部分について、どのようなやり方で、どのようなプロジェクトチーム構成で対応すべきか等を検討する(担当部局等において対応できるものは従来どおり担当部局で対応する)。

なお、これら運営委員会、プロジェクトチームにおいては、真に学生の立場に立って要望や悩みを理解するため、学生を委員、スタッフとして迎え入れて運営の柱に据え、学生の視点、知恵、活力を最大限に活用する。彼ら学生は、公募、もしくはクラブ、サークル等を通じた自他薦とする(プロジェクトで扱うテーマや専門性によって異なる)。

また、対応するプロジェクトの内容いかんでは、高度な専門性が求められる場合も想定される。このような場合は、外部から専門スタッフを招聘し、実効的な対策の実施について助言を得ることとする。

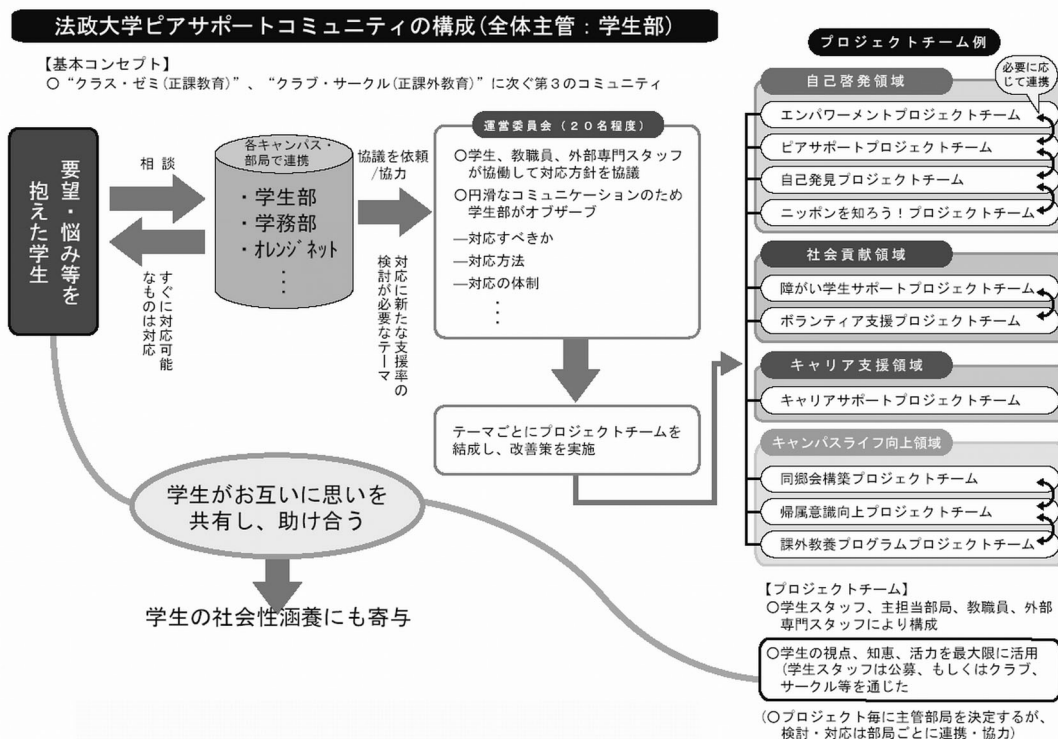


図1 法政大学ピアサポートコミュニティ構成図

(2) 運営

PSCの総括を行う運営委員会は、学生部のオブザーブの下、学生、教職員、外部専門家が共同する20名程度の組織で学内に存在する学生支援の課題について対応方針を協議する。課題解決に当たるプロジェクトチームには責任部局を置き、その下で学生スタッフは検討・実施するテーマについて企画、実施、調達等全面的に運営に参加する。この運営委員会、プロジェクトチームの総体を「法政大学ピアサポートコミュニティ」と総称し、その責任部局を学生部が務めることとなる。

(3) 具体的な展開テーマ

「第3のコミュニティ構築」、「学生の成長発達支援」等々といったキーワードをコンセプトに各プロジェクトを構成する。プロジェクト個々の詳細については運営開始後に検討するが、現状においては、ある程度の活動のベース、ニーズと効果が見込める以下の3領域について取り組むことを想定している。

(i) 自己啓発領域

学生の疑問・不安に応えつつ、学生の自己啓発を目的にするプロジェクトである。ハラスメント対策を含む人権啓発活動もこのプロジェクトの課題となる。また、正課授業で扱わない現場体験型の教養習得、社会人としての常識や基礎的なスキル修得方法等も提供する。さらに、学生の就職活動支援に関わるプログラムにも関与する。

プロジェクトの例：エンパワーメント（新入生合宿、新入生ワンデイセミナー、サークルリーダーズキャンプ等）自己発見（アサーション・ボイストレーニング、ファシリテーショントレーニング等）ニッポンを知ろう！（日銀・裁判所等見学、歌舞伎・能楽等鑑賞会等）ピアサポート（新入生サポーター、サポートルーム等）等。



写真1 アサーション講座

(ii) 社会貢献領域

まず、市ヶ谷、多摩、小金井の3キャンパスに障がい学生支援室を設置し、障がいを持つ学生に対して、健常者と同レベルで講義を受けることができるよう講義保障を行うとともに、学生部と連携した学生生活支援、キャリアセンターと連携した就職活動支援や、ノートテイク養成のための講習会、障がい者について理解を深めるための講演会等を一般学生、教職員を対象に開催する。

日常のノートテイク、PC通訳をはじめそのコーディネートに加えて、講習会、講演会など、支援室の主体的活動は学生ボランティアが担うものとする。このような日常の活動を通して、障がい者のコミュニケーションフィールド（居場所）の創出、福祉領域での実践と学問の有機的連動、福祉マインドの醸成を目指す。

プロジェクトの例：障がい学生サポート、ボランティア派遣等。



写真2 災害救援ボランティア講座

(iii) キャンパスライフ向上領域

例えば、世代や所属を超えた同郷会の構築や、神宮球場や甲子園ボウル観戦ツアーを通じて、愛校心の涵養、キャンパスライフ（学校の居心地）を現状より改



写真3 神宮応援ツアー

事例36 法政大学

善向上させるための策の検討、実施を行う。

プロジェクトの例：同郷会構築、神宮・甲子園ボウル応援、課外教養プログラム等。

5. 本プログラムの有効性（効果）

本取組の特徴は、「学生の要望や悩みを、学生の協力の下に大学全体で解決する」という仕組みの構築である。

日本経済団体連合会の調査結果でも示唆されている通り、個人主義化の進む今日においても、一般企業は現在の若者に、「コミュニケーション能力」、「チャレンジ精神」、「協調性」、「主体性」といった、いわば「問題解決能力」を持つ人材を求めている（図2）。

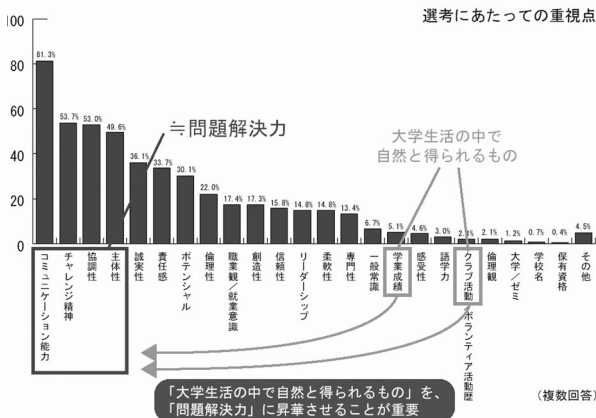


図2 企業が若者に求める能力

出典：(社)日本経済団体連合会「2006年度・新卒者採用に関するアンケート調査結果」2007年

本取組の中で、PSCの学生スタッフが、同世代学生の抱える要望や悩みに耳を傾け、たとえそれがそれまで遭遇したことがなかった問題であっても共に考え、問題の解決に導く、という営みを続ければ、学生の視点に沿った実効的な解決策が立案できるのみならず、解決にあたる学生スタッフの社会性涵養、上に示したような「社会の求める人材育成 (= 社会ニーズの達成)」にも寄与するものとなる。

本学の学内調査のデータによれば、学生の悩みは多様である一方、その解決のチャンネルは非常に偏っている（図3）。

学内調査から、学生は多様な悩みや不安を抱えているが、それを解決するための「大学の取組」や「場（コミュニティ）」が十分でないことが明らかになって

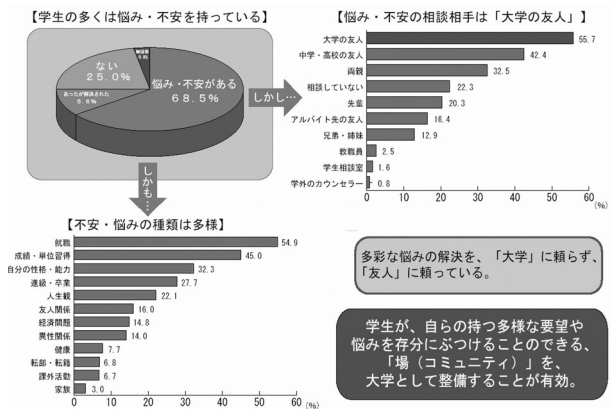


図3 学生の悩み、その相談相手

資料：「法政大学 学生生活白書 2003年」

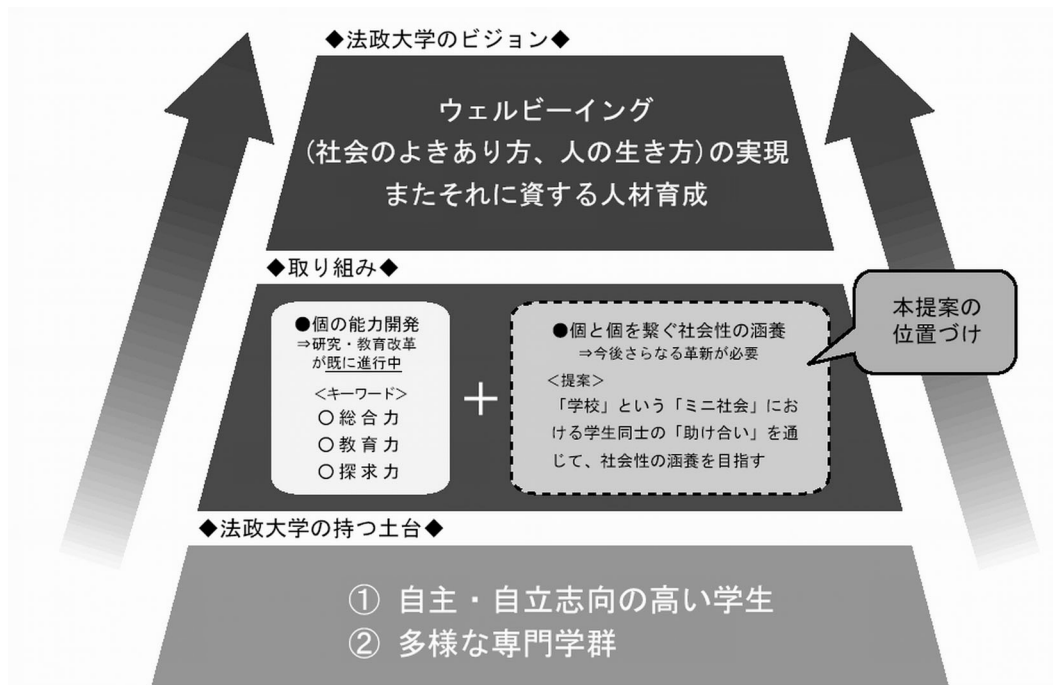


図4 本取組教育・研究との関係

いる。本取組は、学生に対して、多様な要望、悩みを存分にぶつけることのできる「場（コミュニティ）」を与えるものである。

本取組は、本学における教育活動や研究活動に位置づけ可能である。

本学では、伝統的に自主・自立志向の高い学生たち、また多様な専門学群を土台に、ウェルビーイング、すなわち「社会のよきあり方、人の生き方」の実現に寄与する人材育成を目指している。

この観点から、教育・研究面では、すでに「総合力」、「教育力」、「探求力」をキーワードに改革が進行中であ

る。しかしながら、このような研究・教育によって強化される個の能力を実社会の問題に適用できるようにするためには、他の人の要望や悩みを正しく理解したり、その解決のために自らの個の能力と他人の個の能力をどうつなげばよいかを考えたりといった、「社会と繋がり、いろいろな個と助け・支え合っていく」意識の涵養が不可欠である。本取組は、大学というミニ社会において、学生たちが実在する問題解決に取り組むことで、講義の聴講や学術研究の実施のみでは得られない、そのような意識の涵養を支援するという位置づけも持っている。

表1 本プログラムの取組改善調査項目表

対象	調査項目（案）
利用学生	使いやすさ／実効性の程度／不満（プライバシーが守られなかった／専門性のあるスタッフがいない等）等
利用しなかった学生	利用しなかった理由（自らの要望・悩みへの対応メニューがなさそうだった／認知していなかった等）等
学生スタッフ	学生スタッフになったきっかけ／働きやすさ／就職先・率／友人等の反応／取組を通じた意識の変化／行動の変容等
学生スタッフ以外の学生	学生スタッフとして働きたいか／どのようなインセンティブがあれば学生スタッフになるか等
運営に関わる学校側教職員	以前と比べた学生支援業務に対する負荷の増減／コスト項目／学生の意識の変化等
外部協力者	協力のインセンティブ／学生の意識の変化／法政の学生に対するイメージの変化等

表2 本取組実施計画表

実施項目		19年度	20年度	21年度	22年度
全体運営	インフラ整備	窓口の設置/運営/外部協力者も含めた体制構築	・学生への周知(ウェブ等整備) ・プロジェクトチーム運営支援/利用促進 ・新規プロジェクトチームへの展開検討		(左記に加え)自立的運用、他校への展開検討/取りまとめ
プロジェクトチーム(PT)運営	自己啓発領域	新規取組開始(新入生ワグイセミナー/自己発見講座等を予定)	新規取組開始(アクション・ホストトレーニング等を予定)	新規取組開始(サポートルーム設置を予定)	(左記の継続)
	社会貢献領域	・「障がい学生支援室」(仮称)を設置、ノートテイク、コーディネートを担う学生ボランティアは学生部が中心となって募集 ・ノートテイク養成研修会、日常の障がい学生に対する学習支援やキャリアセンターの協力を得た就職活動支援、一般学生に対する講演会などは支援室を拠点として学生が主体となって行う。			
	キャンパスライフ向上領域	・同郷会準備のための学生ボランティア募集 ・プロジェクトの企画立案、準備	・新入生歓迎会と同時期に同郷会(3県)開催 ・ブログ/広報誌による発信開始	・さらに3県程度同郷会立上げ ・各県の出張所やアンテナショップでのインター実施等	県別の卒業生組織とのネットワーク作り
評価		各年実施し、問題点の抽出、拡張もしくは整理すべき取組を検討			

6. 本プログラムの改善・評価

本取組の評価に関しては、ユーザである利用学生、利用しなかった学生、学生スタッフ、学生スタッフ以外の学生、運営に関わる学校側教職員、外部協力者等に対するアンケート、聞き取り調査に基づいて評価・改善を行う予定である。評価の観点は、表1のようなものを想定している。これら評価は、1年ごとに実施し、適宜改善に活用する。

7. 本プログラムの実施計画・将来性

本取組に関しては、まず新入生に周知徹底することにより、一定以上の利用率を確保する。本取組は、各部局においてすでにでき上がっている活動基盤の上に実施されるものであり、また本取組の特色である「部局・学生・教職員の連携」は学生部の責任において確保するため、実施における組織性については問題がないと考えている。さらに、これらに加えて、学生スタッフの知恵、活力を最大限に活用する予定である。

選 定 理 由

法政大学においては、修学支援・学生相談室・就職支援・奨学金制度・課外活動支援・課外教養プログラム・学生生活支援・障害学生に対する支援等について、大規模大学の特性を生かしながら、明確な目標を持って取り組まれています。新入生合宿及びオープンキャンパスへの学生スタッフの参画、キャリアセンターにおける学生アドバイザーの設置、学内環境のための学生監査員の採用など、学生の力が大学コミュニティの維持・発展に活かされています。

また、現代生活に必要なでも関わらず正課からは抜け落ちていて課外活動でも行われていない課題を、学生主体の「課外教養プログラム」として取り上げ、支援している点も評価できます。

本取組では、学生から寄せられる要望や悩み等のうち、単独部局では対応の難しいもの、あるいは複数部局で対応した方が良いものを取り上げて「法政大学ピアサポートコミュニティ」で支援しようとしています。これまでの実績を基盤として次の発展を図る優れた取組であり、他の大学等の参考となるものと言えます。